

Made in U.S.A.

GEORGES DE BEAUREGARD
PRESENTE
ANNA KARINA
DANS

AVEC
MARIANNE FAITHFULL
JEAN-PIERRE LEAUD
LASZLO SZABO



DRESSTERIOR
PRESENTS

1966 / FRANCE-ITALY / color / cinemascope / 87mins
distribué par N.S.W.

UN FILM DE
JEAN-LUC GODARD

UN FILM
PO
ETIQUE

Ferracci



K&K/Q&A

'66/'99、ゴダール/カーリーナ
「Made in U.S.A.」、
東京/パリ、Q&A/いくつか

●Q: 梶野 彰一

○A: カヒミ・カリイ

●「Made in U.S.A.」ですが、観ての感想、どうですか？

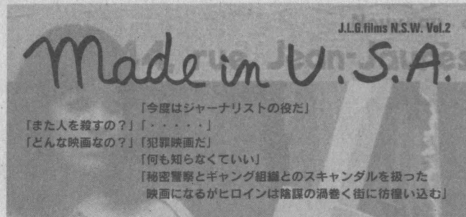
○色などの視覚的な所や、音の使い方がとても面白いになりました。あとは、キヤスティング、マリアンヌ・フェイスフルやジャン＝ピエール・レオー、小森橋子などが出てきた時は、“お？”という感じで、またアンナ・カーリーナとの関係（別れた後というのを含めての）の終りのほっとしているのを感じられる気がしました。

●この象徴的で大胆なタイトル、「Made in U.S.A.」という言葉自体からイメージすることは？

○XXLのTシャツのタグ、レインボーのM&Mのチョコ、アメリカン・コミックなど。Made in U.S.A.と書いてあるだけで何でも欲しくなってしまう子供の頃を思い出します。アメリカ映画をよく観て、あこがれていた頃。フランスの映画を観るようになる前の頃でした。何でもMade in U.S.A.のもの、色がカラフルできれいで、大きくて、大量生産されているイメージがありました。

●僕の目から見ていて、フランス人はアメリカを大好きながらも、結構アメリカのこと大嫌いなんじゃないかと感じるんですが、例えばジャズ、ココ・コー、マルボロ、ヒップ・ホップとか。それは60年代から現在にいたるまで。カヒミさんはどう思われますか？

○フランスは自分の国にとても誇りを持っている半面、コンプレックスもあって、それがアメリカに向いているようなところはあると思います。ゴダールも、私の好きなフランスのアーティスト、ゲンズブール、ポリス・ヴィアンなども、



当時はアメリカかぶれだったようです。彼らの場合、普通のフランス人より、

かなり堂々と、「アメリカを嘲笑しながらも、結構アメリカのこと大好きなフランス人」を認めているところがあったのではないかと思います。今はもっとこんがらかっているような気がします。

●日本では「女は女である」「小さな兵隊」「ANNA」などが劇場公開されていて、ここ数年アンナ・カーリーナが人気を得ているのですが、彼女について…

○実は、もう少ししたらアンナ・カーリーナに会う機会があるのです。今の彼女のことを入って聞くと、時期は流れたものの印象はかわらぬというとか、作品からの印象より魅力的な女性という感じがします。彼女は今の日本での人気のことはあまり知らないうです。●ゴダールのプロデュースした女性「アンナ・カーリーナ」という視点でアンナ・カーリーナについて、そしてプロデュース者、ゴダールについてはどう感じますか？ 自らもアーティストとしてプロデュースされる、そして自ら自らプロデュースするというアーティスト（=ある意味で女優と近いと思うのですが）としての立場からの視点もふまえて、○ゴダールもゲンズブールのように、アンナ・カーリーナやアンヌ・ヴィアゼムスキーら自分のパートナーと作品を作ったけれども、ゲンズブールはまったく違うプロデュースをしていると思います。ゲンズブール（ロジェ・ヴァティムなども）が、ビグマリオンと書かれているように、彼女たちを通して“自分のなかの美”のようなのを

表現しているのに対して、ゴダールは“女性”そのままのものに対しての疑問や憧れを表現しようとしている感じがするのです。アンナ・カーリーナも、演技をしているにもかかわらず、自分自身を表現していて、ゴダールのほうがそれを忠実にカメラにおさめようとしていたようにうかがえるところが興味深いです。その後、彼女が自分自身で映画を撮りはじめたところなど、アンナ・カーリーナにはとてもアーティスティックなところで興味があります。●メルシー

STORY
ジャーナリストのボローは謎の死を遂げた恋人の消息を求めてある都市を訪れる。そこはアメリカ化されたフランスの街。彼女を取り巻く登場人物はドナルド・ダック、リチャード・ワイドマーク、ドリス・溝口…といずれも映画人の名をもった怪人物ばかり。真相は推しきれず、しだいに彼女は警察とギャングとの陰謀に巻き込まれていく…街角のバーに響くマリアンヌ・フェイスフルの「As Tears Go By」。全編にちりばめられた引用の歌々、ハリウッド・シネマへの批評的リミックス。映画の傑作とアイロニーに満ちたゴダールとアンナ・カーリーナとの関係。ゲンズブール（ロジェ・ヴァティムなども）が、ビグマリオンと書かれているように、彼女たちを通して“自分のなかの美”のようなのを



Un film POETIQUE. Un film POLITIQUE. Un film POLICIER. 「詩的な映画」「政治的な映画」「探偵映画」。ゴダールが自ら編集した全く無音の予告編で、さらに公開当時のオリジナルのポスターでも、そう歌われているとおり、Made in U.S.A.としていたようにうかがえるところが興味深いです。その後、彼女が自分自身で映画を撮りはじめたところなど、アンナ・カーリーナにはとてもアーティスティックなところで興味があります。●メルシー

日本女性ドリス・溝口が爪弾く歌、カフェでマリアンヌ・フェイスフルが歌う「As Tears Go By」、タイプで讀らる「未完の小説」、挿入されるダイアログ、ゴダールはいったつ詩的。「左翼青年」「右か左か…」「自由」「戦争」、随所に挿入されるお得意の政治的メッセージ。

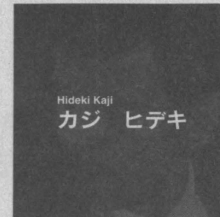
Made in U.S.A.はゴダールの象徴ともいえる詩的で政治的な演出の中で、アンナ・カーリーナ演じるボローがフィアンセだったリチャード・PO…の死の真相を追求するという探偵劇、なわけです。この映画はまずタイトルだけである。Made in U.S.A.というタイトルを掲げ、登場人物の名前はみんなアメリカ風で、舞台となるのはアメリカ化されたフランスの町、アトランティック・シティという設定。この下にゴダールが描いたアメリカ観とは？「フィクションが現実をし、ハリウッド・ポスター主演のフィクション映画」「政治映画、すなわちシネマ二映画+流血」。いや、自らそんな道方もなく大きな疑問符を打ってみたものの、正確な回答など出せない。ただあるのは、ゴダールの'60年代を



象徴するような群像で華やかな華やかな色の配置。アメリカン・コミックからの映像コラージュ。それからおきまりのサウンド・コラージュ…ピストル、ジェット機、クラクション、サウンド・トラックはベートーヴェンのピアノ・ソナタにシューマンの交響曲。アンナ・カーリーナのカラフルな、シックな衣装。カラー撮影にうつってつ快晴の光。ギャング、ピストル、ガレージ、PINNボール。

冒頭のタイポグラフィで赤と白と青を基調にしたゴダールのカラー配置はフランスのトリコロールなのかアメリカの星条旗なのか？どこまでシリアスでどこまでフェイクなのか？U.S.A.に対しての憧憬なのか嘲笑なのか？

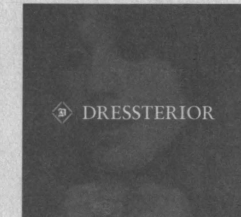
そういう「中国文」におけるマオイズムへの憧憬と感覚的に近い。私的な解釈で言い切ってしまうなら、すべての要素において突飛で斬新、そして観念的な'60年代ゴダールのアート感覚、そのポップ感覚のみが、アメリカ的ポップへとつながる。ときにアメリカを嘲笑しながらも、アメリカへの憧れを断ち切ることができないフランス人の微妙なポップ感覚はやっぱり絶妙のフランスで常に最高のポップ値を示すことは僕たちにとっては明確な事実。Made in U.S.A.'99年の待望のリヴァイヴァルにおいて、そこまで野望に燃じぶつたことを聞くまでもなく、単純に'66年のゴダールとカーリーナを楽しめばいいのかも。Made in U.S.A.それはノーテンキな象徴だから。（観音にして本音）



「気狂いピエロ」の最大の魅力は光だと思ふんです。あの光なしに映画は成立しない。光=太陽とかいうか。狂ったようにまぶしい夏のバリの、そして南仏の光に狂わぬ、何もかもが絶望に向かってすべり落ちていく。カメラの「異邦人」の主人公がそうであったように。

あさはかな高校生は僕もすべてを太陽のせいにして。社会に嫌を吹きまわった。とにかく僕はその光を求めた。ずっとその光をずっと探し求めて生きてきた（ちょっと大げさ？）.そしてやっと今見つけた。

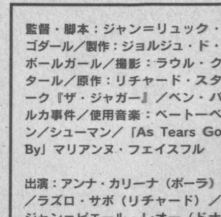
何が？
これだよ。
「Made in U.S.A.」
赤と白のストライプのバスローブ。気狂いピエロのアンナ・カーリーナの複製ジャポネゼ。タイプライターの音。日常にころがるダグヘッド。死体。黄色のワンピース。ピストル。ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ第9番水調曲。やっと見つけた。「気狂いピエロ」と「彼女がここに…」のはざまにこんな奇跡が起こったんだ。とにかくその中間なんだ。そんな刹那。そして横目に気狂いのアンナは車に乗りこみもう帰ってこなかった。ただ僕らの面の中にはアンナの“一生懸命”とは替わらなかったの。舞歌よろしくマリアンヌ・フェイスフルの「アズ・ティアーズ・ゴーズ・バイ」が美しく響きわたる。みんなも求めてたんだよね。この光。



「気狂いピエロ」の最大の魅力は光だと思ふんです。あの光なしに映画は成立しない。光=太陽とかいうか。狂ったようにまぶしい夏のバリの、そして南仏の光に狂わぬ、何もかもが絶望に向かってすべり落ちていく。カメラの「異邦人」の主人公がそうであったように。

あさはかな高校生は僕もすべてを太陽のせいにして。社会に嫌を吹きまわった。とにかく僕はその光を求めた。ずっとその光をずっと探し求めて生きてきた（ちょっと大げさ？）.そしてやっと今見つけた。

何が？
これだよ。
「Made in U.S.A.」
赤と白のストライプのバスローブ。気狂いピエロのアンナ・カーリーナの複製ジャポネゼ。タイプライターの音。日常にころがるダグヘッド。死体。黄色のワンピース。ピストル。ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ第9番水調曲。やっと見つけた。「気狂いピエロ」と「彼女がここに…」のはざまにこんな奇跡が起こったんだ。とにかくその中間なんだ。そんな刹那。そして横目に気狂いのアンナは車に乗りこみもう帰ってこなかった。ただ僕らの面の中にはアンナの“一生懸命”とは替わらなかったの。舞歌よろしくマリアンヌ・フェイスフルの「アズ・ティアーズ・ゴーズ・バイ」が美しく響きわたる。みんなも求めてたんだよね。この光。



監督・脚本：ジャン＝リュック・ゴダール/製作：ジョルジュ・ド・ボールゴール/撮影：ラウル・クタル/原作：リチャード・スターク「ザ・ジャガー」/ペン・バルカ事件/使用音楽：ベートーベン/シューマン/「As Tears Go By」マリアンヌ・フェイスフル
出演：アンナ・カーリーナ（ボロー）/ラズロ・サボ（リチャード）/ジャン＝ピエール・レオー（ドナルド）/小坂穂子（ドリス・溝口）/マリアンヌ・フェイスフル（バード嬢）

字幕監修：山田宏一
字幕：寺尾次郎

J.L.G.films N.S.W.
vol.1 「小さな兵隊」
vol.2 「Made in U.S.A.」
vol.3 「カラビニエ」(2000年公開予定)

11/023(sat)-11/5(fri)
11:05A.M./8:30P.M. モーニングショー
11/6(sat)-11/17(wed)
11:40/1:25/3:10/4:55/6:40

ビデオ付特別前売鑑賞券(2200円) 当劇場にて発売中!

made in U.S.A.
前売り券 1,400円
当日一般 1,700円
当日学生 1,400円

ホワイティ 藤田泉の広場M-10右とがる角へ5分
扇町ミュージアムスクエア
06・6361・0088 www.oms.gt.jp